

主観的把握 (S モード) の理論、証拠および特性

—身体性メタファー理論の観点から¹—

関西大学 鍋島弘治郎 spiralcricket@gmail.com

1. はじめに

本項では、主観的把握²としてのSモードを中心に、メタファーとの関連から論じる。2節では、Langacker (1990)の主観化を紹介する。3節では、Sモードの特性を、4節でSモードとOモードの区分の類例を検討する。5節はメタファー理論からSモードの重要性を主張する。6節はまとめである。

2. Langacker (1990) の主観化および主観的把握の重要性

主観性は定義が著しく困難な用語であり、諸分野に諸説が存在し、一般には、個人および人間一般の情動、認識、判断を含んだものが広く主観的と呼ばれている。言語学の分野では、Langacker (1990)による視点的主観性研究と Lyons の流れを汲む Traugott らによる一連のモダリティの主観性研究の二大研究に大別される(中右 2007)。前者の研究は、主体が対象化されているかどうかで主観性と客観性を分けている。具体的には、Langacker (1990) の以下の例が挙げられる。

- (1)a. Anne is sitting across the table from Beth. b. Anne is sitting across the table from me.
c. Anne is sitting across the table.

(1)に対応する認識を図にすると図1と図2になると考えられる。(原図は Uehara, 2006)

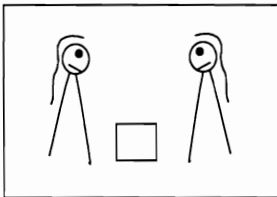


図 1

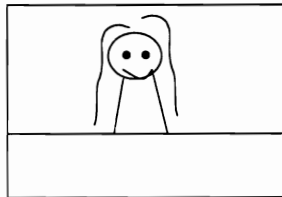


図 2

(左が(1a)、右が(1c)に対応)

Langacker(1990)は、(1b)や図1のように主体が認識や言語に登場する例から、(1c)や図2のように主体が認識や言語から姿を消すようになることを主観化(subjectification)と呼んでいる。この定義を大雑把に言えば、自己を対象化した概念化を客観的と呼び、自己を対象化しない概念化を主観的と考えられる。これは池上(上述)の主観性の考え方も基本的に合致している。本研究では、この意味における主観性(「視点的主観性」)を取り扱うことにする。これには3つの理由がある。まず、第一に、Traugott らの情動、認識、判断などの意味における主観性(「モダリティの主観性」)は、視点的主観性を前提とする。モダリティの主観性を取り扱うためには、主体の位置を空間内に位置づけるとともに、その主体の(具体的意味および抽象的意味における)「向き」と「遠近関係」を決定しなければならない。第二に、モダリティの主観性は非常に幅広いものを包含し、ある現象が主観的かどうか判断の不明瞭な場合が多いが、視点的主観性はその認定が容易であり、上述の定義を使用すれば主観的かどうか明確に判断できる。第三に、視点的主観性は状況認知および身体性と密接に関わっており、4節に見るように視点的主観性の区分は各分野で注目を浴びているからである。項が消えることによって視点が浮き彫りにされるのは以下の関係名詞の例などに顕著である。(2)~(7)は項の欠如と視点の出現に関わる用例である。

¹ この研究は、科学研究費補助金 基盤研究(C)一般 「主観性と状況認知に基づくメタファー理論の探求—認知言語学的研究—」(課題番号 20520448)の補助を受けて行われています。ここに感謝いたします。

² 池上 2003, 2004, Ikegami 2005.

- (2) a. 上司と部下のよい関係を築くために b. 部下とのよい関係を築くために c. 上司とのよい関係を築くために
- (3) a. A組とB組の騎馬戦の日がついやってきた b. A組/B組との騎馬戦の日がついやってきた
- (4) a. 嫁と姑との戦いは続く b. 嫁との戦いは続く c. 姑との戦いは続く
- (5) (カップルの写真の下に) a. Hiromi with Ken, Jan 15, 2005 b. with Ken, Jan 15, 2005. c. with Hiromi, Jan 15, 2005.
- (6) a. The ultimate outcome of the negotiation between the Union and the management will be known till Friday.
b. The ultimate outcome of the negotiation with the Union will not be known till Friday.
c. The ultimate outcome of the negotiation with the management will not be known till Friday.
- (7) a. The game between the Cardinals and the Scarlet Knights is scheduled to be televised on ESPN.
b. The game against the Cardinals is scheduled to be televised on ESPN.
c. The game against the Scarlet Knights is scheduled to be televised on ESPN.

3. 主観的把握としてのSモードの特性

話者がいるにもかかわらず、背景化され対象化されていない図2のような認知形式(右側)をSモード呼ぶことにする。これは、Subjective (主観的)、Situating (状況的)、Self-centered (自己中心的)の意味で使用している。私が、Anneと向かい合っている場合、網膜には、右のようなSモード的な図式しか映っていないか、頭の中では、常に左のような図式も同時に再構築している、あるいは、必要に応じて再構築していると考えることができる。自己を客体化した図3のような認識モードをOモードと呼ぶことにする。Oは、Objective (客観的)、Object permanent (物体永続的)、Ontological (存在論的)モードという意味である。

図3では、両モードの違いを遠近に関して表現する。LMはランドマーク(Landmark)の略で基準点のこと、TRはトラジェクター(Trajector)またはターゲット(Target)の略で、注目の対象のことである³。右はご存知の通り、透視図法(遠近法)となる。また、近い対象をTR1、遠い対象をTR2とし、観察者をLMの地点にいるものとする。表1にOモードとSモードの特性を比較する。

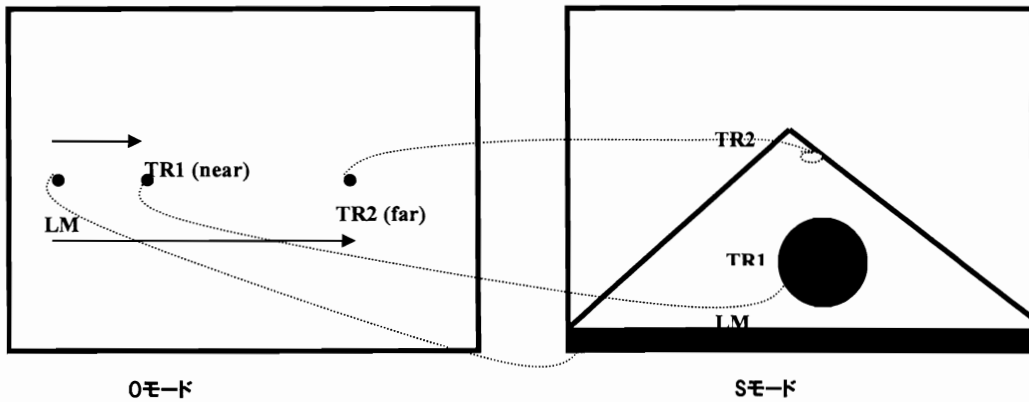


図3 遠近のOモードとSモードの対応関係 (鍋島, 2003b, 名称は部分的に変更)

	自己	観察主体	視点	世界	五感	哲学の系譜
Sモード	自己中心的 「絶対者」	あり	あり	いま・ここ「知覚されな いものは存在しない」	すべての感覚	現象学的
Oモード	自己客体化「世界の 中のちっぽけな一部」	なし	なし	無限	視覚から視点を捨象	存在論的

³ LMとTRは、Lakoff(1987)、Langacker(1987)など認知言語学で一般的に使われる表記である。

表1 SモードとOモードの特性比較

まず、Sモードで自己は絶対者であるが、Oモードでは基本的にとどの存在にも特権的地位が存在しないので、無限の世界の中の非常に小さな一点になる。観察主体の欄は説明がやや複雑である。Sモードには絶対者としての自己が観察主体であるが、世界自体であるOモードには特定視点からの観察という行為が存在しないので、観察主体は存在しない。別の考え方をすれば、存在物または有情物の観察視点を合成したものと考えられるかもしれないし、神の視点と呼ぶこともできるかもしれない⁴。Oモードに観察主体を存在しないとした場合、当然、視点(観察主体から眺める方向性、すなわちパースペクティブ)は存在しない。

Sモードにおいて、世界は「いま・ここ」に限定され、知覚されるもののみから構成される世界であるとする。それに対してOモードにおける世界とはすべてであり、日本にいる現在でもパリのあのアパートは存在し続けているという想定の世界である。五感に関しては、Sモードはすべてを含む。一方、Oモードは、五感から抽象化された存在物と存在物同士の世界であり、方向性も捨象されている。哲学的な観点からはSモードは存在の有無に関する議論を一旦停止(エポケー)した現象学の世界、Oモードはそれ以前の存在の実在性を前提とした存在論的世界といえる。次項では、Sモードで観察される五感と「いま・ここ」の世界に見られる感覚情報の単調な対応関係に関して思弁的に論述する。

3.1 Sモードにおける複数の単調な対応関係

前項でSモードを紹介したが、SモードはOモードと異なり、非常に複雑かつ体系的な感覚情報が利用可能である。本項では、Sモードで入手できる情報と情報間の対応関係を取り扱う。3.1.1で感覚様相内単調対応関係(intra-modal monotonic correspondences)、3.1.2で感覚様相間単調対応関係(inter-modal monotonic correspondences)を紹介する。

3.1.1 感覚様相内単調対応関係(intra-modal monotonic correspondence)

遠近の認知、奥行き認知には多くの専門的研究があるが、さまざまな要素が関わっていることがわかっていく。視覚というひとつの感覚様相の刺激においても、遠くにあるものは、小さく、薄く、ぼんやりと見える。また、通常、上方に配置され⁶、その動きは小さく動きの速度は遅い。これを図式的に示すと図4のようになる。

遠近	大きさ	濃淡	肌理(きめ)	配置	移動	移動速度
遠い	小	薄	密	上	小	遅
近い	大	濃	粗	下	大	速

図4 Sモードにおいて遠近認知に関わる視覚的要素(遠近と視覚の整列対応)

このようにさまざまな視覚的特徴が遠近認識の鍵となっている。さらに、それらの情報が合致することによって確証度が高くなる。これらは、他の条件が同じであるならば、例えば、近くの方が遠くのものよりも小さく見えるということはないという点で、単調であるといえる⁷。これらは知覚間および感覚と概念の対応関係であり、絶対ではなく傾向的である。さらに、このような遠近認知の知覚的方略は言語現象の中にもその反映を見ることができる。(8)では、「遠く見える」という字義通りの表現だけでなく、(8b)-(8f)のような表現でも「遠い」という意味合いを伝えることが通常できる。

- (8) a. 遠く見える b. うっすらと見える c. ぼんやりと見える

⁴ あるいは自己偏在的視点でどこにもあるといえるかもしれない。

⁵ 数学において写像が単調性(たんちようせい、monotonicity)を持つあるいは単調であるとは、それが順序集合の間の写像であって順序を保つもの(order-preserving, isotone)であることをいう。

⁶ 人間の目の位置が一定の高さを持っているため、それ以下にあるものは近づけばだんだん下に見えるようになる。また、人間の首と軀は上を向くよりも下を向くほうに有利に構築されている。真下(自分のいる地点)を向いた際、通常で上方に来る視野は前方を指すことになる。

⁷ 距離によっては見え方がほとんど変わらないという地点は存在すると思われる。

- d. 小さく見える e. 僅かに見える f. 微かに見える

3.1.2 感覚様相間単調対応関係 (inter-modal monotonic correspondence)

対象と自己の距離の認知に働くのは視覚だけではない。より幅広くは空間定位という分野として 3 次元的に研究されるこの分野でも、複数の感覚情報が手がかりとなることが知られている。例えば、遠くの対象は小さく見えるだけでなく、それが発する音も小さい。において感じるためにはある程度近くなければいけない。触覚に感知されるためには、接しているか、近くで大きな事象(風や振動など)でなければならぬ。これを図 5 にまとめる。

遠近	視覚刺激	聴覚刺激	嗅覚刺激	触覚刺激
遠い	小	小	(ほとんど)なし	なし
近い	大	大	あり	あり

図 5 S モードにおいて遠近認知に関わる感覚的要素 (遠近と感覚の整列対応)

さらに、移動がある場合には、視覚、聴覚、嗅覚、触覚(振動など)すべてにおいて、近づくほど刺激が強くなる。これは感覚様相間の単調対応関係と呼べる。

4. 主観的把握(S モード)客観的把握(O モード)の類例

本節では、主観的把握(S モード)と客観的把握(O モード)という概念の類例を見る。4.1 で形式意味論の研究を、4.2 で発達研究を、4.3 でその他の研究を見る。

4.1 形式意味論における主観性研究

形式意味論のひとつの主流を形成している状況意味論では、Recanati がモダリティ、時間、場所などを相対化していく中で、認識主体に関して、implicit *de se*を“...are shown to involve a ‘subjective’ perspective that is lacking from thought involving an explicit self-identification.”(Recanati 2007:25)として、「主観的」パースペクティブと呼んでいる。すなわち、自己に関する認識を *de se*と呼び、その中で、潜在と顕在の区分を行い、潜在的な *de se* が 1 人称的、主観的視点と対応することが提唱されている。この定義が Langacker (1990)の主観性と酷似していることから、認知言語学と形式意味論に共通の主観性の定義が得られることが予想される。

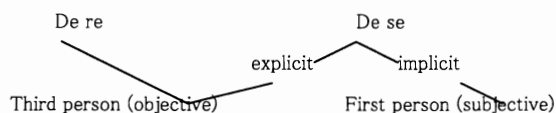


図 6 Recanati (2007) による区分 (Recanati 2007:193)

4.2 発達研究における自己中心参照枠

乾・安西(2001:80-82)では、Acredolo(1978)の実験、Bower(1979)の実験などから、1歳前後の幼児が左右などの自分から見える位置関係でしか事物の位置を把握していない自己中心参照枠の概念が提示されている。これは本研究における主観性現象と同一と考えることができる。また別府(1999)の後ろ指差しの実験、Piaget の対象の永続性も関連する。発達の観点からはまず主観的視点が存在し、その後客観的視点が獲得される方向性が考えられよう⁸。

⁸ これに対して、客観が存在しない乳児の認識世界をいわゆる「参照枠」を利用していると考えうるのかどうかという疑問が広島大学 杉村伸一郎先生より呈されている(杉村、個人談話)。

4.2.1 Acredolo (1978)

乾・安西(2001)によれば、Acredoloは以下の実験をして乳児が自己中心参照枠に従っており、環境中心参照枠を獲得していないことを確認している。

乳児は正方形の部屋にいて、まず A の場所で部屋の中央から発せられるブザー音を聴く。その直後にどちらか一方の窓(この場合窓 1)から乳児が興味を示す対象(人間の顔)が呈示される。これがくり返されると、乳児はブザー音がなるとまどから興味対象が提示されるより前に窓の方向を向くようになる。その後、乳児は B の場所に移動させられ、同じくブザー音を聞く。(原文ママ)この時、乳児がブザー音に随伴して呈示される興味対象を見るためには、先ほどとは(自己中心参照枠において)反対の方向に頭を向けなければならない。実験の結果、6ヵ月児では、有意に窓 2 のほうに頭を向け、この時期の乳児の空間行動は自己参照枠に基づいていることが示された。

乾・安西(2001:81)

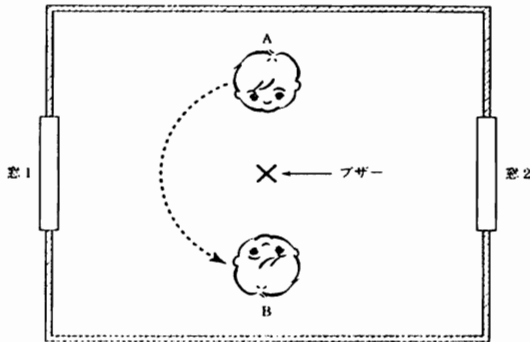


図 3.11 Acredolo(1978)の実験概要

図7 Acredolo (1978)の実験

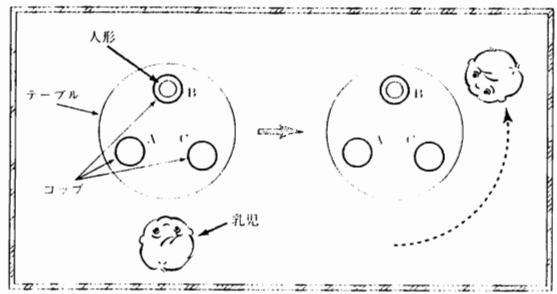


図 3.12 探索行動を指標にした実験

図 8 Bower (1979) の実験

4.2.2 Bower (1979)

さらに、同様の探索行動に関連した Bower (1979)の実験が乾・安西(2001)では紹介されている。

人形を中央のコップに入れたあとで、乳児がテーブルの回りを回る(あるいはテーブルが回転すると)、人形の乳児に対する相対的な位置は中央から右側へと変化する。しかし、一才前後の乳児では、自分と3つのコップの位置関係が変わったにもかかわらず、最初の状態の場合と同様に中央のコップ(この場合コップ A)から人形を探そうとする。こうした自己中心参照枠に基づく行動はおおよそ 2 歳以降までも続く。

乾・安西(2001:81)

自己中心参照枠とは、絶対的な世界座標ではなく、自分を中心とした相対座標を使用した世界認識であるから、本稿で述べる S モードと等価と考えることができる。これら二つの実験は、子供が一定の年齢まで、S モードしか有していないことを示している。

4.2.3 後方指差し

別府(1999)に紹介された、別府(1996)、Butterworth & Jarret (1991)の実験は、シャボン玉を吹くなどして、大人が子どもに対して「ほら見て」というように子どもの後方を指差す実験をした。対象は、5ヶ月から1歳8ヶ月までの幼児であった。結果は、差されたシャボン玉を後方向を振り返って見る行動は1歳0ヶ月児以上にならないと可能にならないということであった。この結果も O モードが1歳未満の幼児にとってまだ十分に獲得されていないと考えたと納得がいく。なお、Butterworth & Jarret (1991)では、18ヶ月まで後方指差しの理解が不十分とされている。

4.3 言語人類学その他

言語人類学では、井上(1998)などで絶対的指示枠(例:東西南北)と相対的指示枠(例:左右)の区分が述べられている。また、心理学全般においては、Barsalou(Barsalou 2008)が、Grounded cognition としてエピソード記憶など状況的身体的認知を基盤とした概念論の潮流に関してまとめている。もちろん、言語学におけるダイクシス(deixis 場面指示性)の研究(Fillmore 1997 など)は「いま」「ここ」を中心とした主観的認知の言語的記述に関する研究であり非常に重要な位置づけにある。

5. 認知メタファー研究と S モード

従来から、認知言語学では、身体性、経験基盤などがメタファーに重要と考えられ、これらは主観性の概念と密接に関わっている。近年、主観性の概念を利用すれば、現実を表す複数のメタファーが「<<現実はこちら:非現実はこちら>>」に集約されるなど、メタファーの根拠として主観性が重要な役割を示すことがわかってきている。さらに、具体的認知を抽象的認知に投射する機構としてのメタファーは、実体験に基づく主観的な環境認知とこれに伴う身体図式(Merleau-Ponty 1942)を抽象的思考に援用する一般機構と考えることが可能であり、主観性のメカニズムの精緻化は認知的メタファー研究を大きく進展させる契機を含んでいる。

5.1 S モードにおけるアラインメント(整列対応)

さて、人間の身体は、ほとんどの動物と同様、知覚器官が進行方向に面して配置されている⁹ため、視野が進行方向と合致している。そこで図3の右図は、移動の S モードとして捉え直すこともできる。このアラインメント(整列対応)¹⁰を図示すると図 6a のようになる。

遠近	上下	前後
遠	上	前方
近	下	ここ

図 6a 上下と前後のアラインメント

遠近	上下	前後	時間
遠	上	前	未来
近	下	ここ	今

図 6b 上下・前後・時間のアラインメント

さらに、人間の移動では、自分の足元がメトニミー的に現時点を指し、視野の中心よりやや上方が未来の方向を示す。時間のメタファーでは、前が未来を示すことは早くから知られているが、詳細は譲るとして、自己の移動の経験の中で前と未来は自然に結びつく。これを図示すると図 6a を拡張して、図 6b のようになる。ここにおいて、Lakoff and Johnson (1980)で述べられた「<<近い未来は上>>」に対応する「下」は、「過去」ではなく、「<<現在は下>>」であり、その基盤(動機づけ)は S モードにおける上下と前後の対応関係であることが判明する¹¹。不明であった、さらに現在がここであると「今・ここ」である現時点が現実と考えられ、前方を含むそれ以外すべてが非現実となり、前方は、未実現の非現実領域となる。これを図示すると図 6c のようになる。

遠近	上下	前後	時間	現実
遠	上	前	未来	未実現
近	下	ここ	今	現実

図 6c 上下・前後・時間・現実・非現実のアラインメント

現実のメタファーにおける「理想」、可能性のメタファーにおける「可能性」、希望のメタファーにおける「希望」はすべてこのような未来や未実現の非現実状態の一種であると考えられる。以下に関連すると思われるメタファーの用例を挙げる。5.2 で、「<<未来は上

⁹ Fillmore (1997)

¹⁰ 鍋島(2003a)

¹¹ ただし、日本語で「<<未来は上>>」というメタファーが見当たらないことが篠原和子(個人談話)によって指摘されており、事実であれば本書の議論に対して反例となるので重要である。これを回避するために視覚内の未来は「<<存在は見えること(existence is visible)>>」("Whales are disappearing.": 鯨は消えつつあるなど)メタファーと「<<未来は上>>」の両方がかかかって、「視覚で捉えられる程度の遠い存在」→「ある程度、形を伴った未来」という不安定なカテゴリーを形成し、メタファーの衝突が起こっているという解法の方向性があると思われる。

>>を、5.3 で、<<現実_{は下}>>を、5.4 で<<理想_{は上}>>を、5.5 で <<可能性_{は濃淡}>>を、5.6 で、<<希望_{は上}>>を紹介する。

5.2 未来は上

FORESEEABLE FUTURE EVENTS ARE UP (and AHEAD) <<近い未来は上(で前)>> (Lakoff & Johnson 1980)

(9) What's coming up this week? (今週は何がもち上がるのか→今週は何があるの?)

(10) I'm afraid of what's up ahead of us. (私達の前にあること(→未来に起きること)が心配だ)

5.3 現実_{は下} (鍋島 2008)

(11)きちんとした仕事をする人は単なる憧れを持っているだけでなく地に足がついている。

(12)...私たちが生きるのに必要なのは、悟るとか高みに到達することじゃなくて、理想や夢ともにもっとどろどろした現実の地べたでじたばたする ...

5.4 理想_{は上} (鍋島 2008)

(13)ぼくは理想が高いんです (14)理想 理想といってもそれほど高望みしていると思っていないので

(15) 理想をかかげて現在を批判することは良い。石川達三 青春の蹉跎 p.48

(16) .. ラジオの終わった真夜中、エンドレスで流しているCDの一節が焼き付く。自分の道を歩んで、後悔が1/3。それが多分、深みや重みを伴ってふわふわとした理想を一つひとつこつこつやって現実という石ころに変えている ...

www.geocities.co.jp/Hollywood-Miyuki/9119/darkwhisper/199910.html 最終検索日:2003年10月1日

5.5 可能性_{は濃淡} (鍋島 2001b)

- (17) a. うっすらとした可能性 b. 疑いが濃い c. 敗色濃厚 d. ほのかな気配が感じられる
e. 見込み薄 f. 淡い期待がかかる g. あいつと戦っても勝ち目が薄い

今、「期待」「見込み」を良い可能性のグループ、「敗色」、「疑い」などを悪い可能性のグループとすると、表2が得られる。

可能性\よし悪し	良い可能性(見込み、期待など)	中立	悪い可能性(疑い、敗色など)
薄い系	○	○	
濃い系		○	○

表2 判定表 推測される方向性

一体、「薄い」と「良い」の共起を許し、「濃い」と「悪い」の共起を許しながらも、逆の組み合わせを許さない要因とは何なのであろうか。視覚と善悪に関連してすぐに思いつくのは、(18)に見られる「悪いことは黒である」というメタファーである。(鍋島 2001a)。そこで、濃淡に関して、(19)の二つの比喩が合成されている、と考える。

(18) a. 彼はクロだ(犯人だ) b. 灰色高官 c. 黒い霧事件 d. 身の潔白を証明する

(19) メタファー1:<<実現可能性大は濃・実現可能性小は薄>> メタファー2:<<善は白・悪は黒>>

すなわち、「薄い/淡い」、は「白黒」に通じ、「薄」は白、すなわち良いこととしか共起できない。一方、「濃」はこの逆である。これを図式に表すと図10のようになる。こう考えれば、表2の一見、無秩序に思える容認可能性を説明できる。

	良いこと	悪いこと
実現可能性小	薄○白	
実現可能性大		濃○黒

図10 「淡／薄」と「善」および「可能性小」、「濃」と「悪」および「可能性大」の共起関係図

- (20) a. 勝利の可能性が近づいてきた b. 勝利の可能性がはっきりと見えてきた
 c. 勝利の可能性が遠のく d. 勝利の可能性がうっすらと遠くに見える
- (21) It's a long shot. (それはなかなか実現不可能なことだ: バasketボールや射的から)

こうしてみると、濃淡は遠近の S モードにおける知覚的、主観的表現と理解することができる。(20)～(21)の類例も参照。

5.6 希望は上 (鍋島 2002)

- (18) a. 希望を掲げる b. 両手には飛び立つ希望を ゲームソフト AIR 主題歌『鳥の詩』
 c. さあ あなた 連れていって ひかり 飛び越えて 過ぎ去った おもいで 捨てて
さあ たかく 舞いあがる 希望 だきしめて いま 夢を みせてくれる 未来警察ウラシマン挿入歌 『Fire Dancing』

<<希望は上>>を表すと思われる言語的用例は多くない。そこで、表1のような用例をあげ、アンケートを行った。1を「ぜんぜんそんな気がしない」5を「すごくそんな気がする」とした評定平均。回答者は20代男女11名。

表現	評定平均
①希望は右の方にある	2.7
②希望は下の方にある	1.2
③希望は宙に浮いている	4.4
④希望は後ろの方にある	1.1
⑤希望は地についている	2.1
⑥希望は上の方にある	
⑦希望は左の方にある	2.1
⑧希望は前の方にある	

表3 希望のイメージ度

その結果、「希望は上」は、「希望は前」に続き、評定平均が高かった。また、「希望は下」がイメージに近いという回答はほとんどなかった。Sモードを前提とすれば、<<希望は上>>は(30)のような<<希望は遠方>>と同じ現象の異なる側面となる。

- (30) a. 希望の実現に近づいている b. 希望の実現への道は遠い

5.7 5 節のまとめ

これらより、5.1 でみたように、希望は<<現実はこちら・未実現は彼方>>のひとつとして、線と移動の枠組みで考えられることがわかる。継承の概念を精緻化した本章では、これらの二段階にわけて明示的に図に示す。

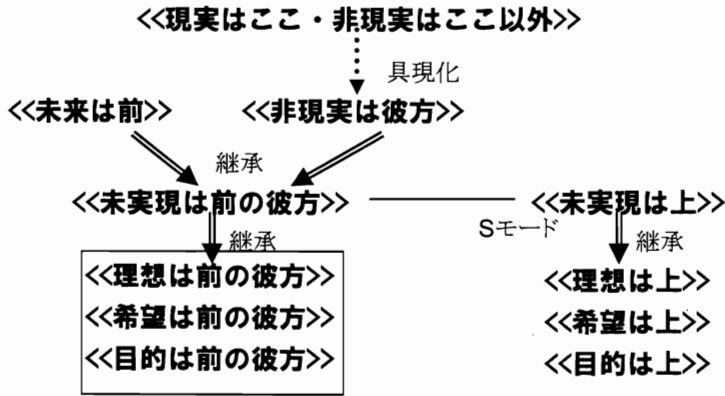


図 11 <<現実はこちら>>から<<希望はこちらの彼方>>および<<希望はこちら上>>までの継承関係

まず、中心となるのは<<現実はこちら>>である。<<現実はこちら>>であることから、<<非現実はこちら以外>>と推論される。<ここ以外>という概念化は、<遠いところ><彼方>とする概念化に詳細化される。さらに、彼方には前後左右という方向性がありうるが、<<未来はこちら・過去は後ろ>>であることから、これから起こりうる非現実状態は未実現なものとして、前方に概念化される。前方の遠くは S モードで上に見えることから、<<未実現はこちら上>>というメタファーも生じる。<<未実現はこちらの彼方>>および<<未実現はこちら上>>というメタファーから、その一形式として、<<希望はこちらの彼方>>および<<希望はこちら上>>が成立する。

6. まとめ

本稿では、主に、主観的把握としての S モードを取り扱った。2 節では、Langacker (1990)の主観化を紹介した。3 節では、S モードの特性を、4 節で S モードと O モードの区分の類例を検討した。5 節はメタファー理論から S モードの重要性を主張した。主観的把握は状況認知や身体性との関連からも重要な概念であり、主観的把握の特性、精緻化、一般化を目指す研究は今後いっそう重要性が増すと予想される。

主要参考文献

- Acredolo, L.P. 1978. Development of spatial orientation in infancy. *Developmental Psychology*, 14, 224-234.
- Barsalou, L.W. 2008. Grounded cognition. *Annual Review of Psychology*, 59.
- Bower, T.G. R. 1979. *Human development*. W. H. Freeman and Company.
- Fillmore, Charles. 1997. *Lecture on deixis*. CSLI Publications. (First published in 1971).
- Ikegami, Yoshihiko. 2005. Indices of a 'subjectivity-prominent' language: Between cognitive linguistics and linguistic typology. *Review of Cognitive Linguistics 3* Amsterdam: John Benjamins
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作他訳 『認知意味論－言語から見た人間の心－』, 紀伊国屋書店, 1993 年)
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980/2003. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald 1987. *Foundations of cognitive grammar. Vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford, Calif.: Stanford

University Press.

Langacker, Ronald. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1 (1): 5-38.

Merleau-Ponty M. 1942. *La structure du comportement*. Presses Universitaires de France, Paris

Recanati, F. 2007. *Perspectival Thought: A Plea for Moderate Relativism*. Oxford.: Oxford University Press.

Uehara, Satoshi. 2006. Subjective predicates in Japanese: A cognitive approach. in Luchjenbroers ed. *Cognitive linguistics investigations across languages, fields, and philosophical boundaries*. Amsterdam: John Benjamins.

別府哲 1999. 視線によるコミュニケーション 正高編『赤ちゃんの認識世界』ミネルヴァ書房

深田智 2001 "Subjectification"とは何か: 言語表現の意味の根源を探る 『言語科学論集』7号

池上嘉彦 2003. 言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標(1) 『認知言語学論考』3: 1-49.

池上嘉彦 2004 言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標(2) 『認知言語学論考』4: 1-60.

井上京子. 1998. 『もし「右」や「左」がなかったら』 大修館書店

乾敏郎・安西祐一郎 2001. 『イメージと認知』 岩波書店

鍋島弘治朗 2001a. 「悪に手を染める」ー比喩的に価値領域を形成する諸概念ー 『大阪大学言語文化学』第10巻

鍋島弘治朗 2001b. 「可能性」はなぜ「薄い」のかー比喩の合成と衝突が生産性を抑圧する場合ー 『Proceedings of the 25 Annual Meeting』 KLS

鍋島弘治朗 2002. 『希望』の概念化ー認知メタファー理論の視点からー 『英文学論集』第42号 関西大学英文学会

鍋島弘治朗 2003a. 言語学的アラインメント試論ー写像(mapping)の骨格としての整列(alignment)ー 『英文学論集』第43号 関西大学英文学会

鍋島弘治朗 2003b. メタファーと意味の構造的性. 『認知言語学論考』. 2:25-109.

鍋島弘治朗. 2008. 現実と理想のメタファー 篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』ひつじ書房

中右実 2007. <言語的主観性>の統一理論に向けてーモダリティ・発話行為・敬語からの展望ー 『日本言語学会第134回大会(2007)公開講演要旨』 <http://www.soc.nii.ac.jp/ljsj2/meetings/134/abstract/public.shtml>